

筑波大学の先進性

大西博雄

前筑波大学総務部総務課課長補佐
現鈴鹿工業高等専門学校事務部長

はじめに

私が、筑波大学に在職していたのは、昭和48年4月の筑波新大学創設準備室からで、開学後の担当職務は「教員人事関係」に8年、「法規関係」に8年、「事務区」に1年余りで、合計17年半になります。従いまして以下に書きますことは、筑波大学の創設期の頃のことであり、今に至って多少ピントがずれておりました際にはお許し願います。

創設期の頃

創設準備の頃から、筑波大学の特色として言われていたことがいくつもありますが、その主なものを思い出して挙げてみますと、

創造的な知性と豊かな人間性を備えた人材育成、国内外に開かれた大学、責任ある管理体制などを謳った「建学の理念」、さらには「教育組織と研究組織の分離」、「学部段階での多様な学生の要請に応えるカリキュラム編成と大学院の重視」、「プロジェ

クト研究組織」、「全学的な大学自治」、「管理運営に対する学外意見の反映」等々を挙げることができます。

私が担当させていただいた職務として、その一つに人事委員会による教員の選考があります。人事委員会では、教員の人事に関する方針や、全体的な配置計画、そして個々の教員の選考が行われ、特に教員の配置にあっては講座制の廃止が最大限に生かされていたと思います。その配置に当たってはまず教育上の必要性からが、そして研究上の必要性からも検討され、配置されておりました。さらにプロジェクト研究などへも当該研究機関に限って期限付きで配置されるなど、常に定員の有効活用が大学全体で実施されておりました。

今一つは、「事務局一元化と事務処理機能の集中化」を挙げさせていただきます。「事務処理の効率化・合理化」はどこでもよく言われることですが、その具体策とし

て、事務の重複を極力排除するなど事務処理機能の集中化を実施したことです。これも事務局一元化がされていることから可能となったもので、正に新構想の特色を十分に生かしたものであったと思います。

しかし、これらの特色は、当時においては、新しい大学を創るというよりはむしろ大学紛争後の改革のように捉えられ、さらには「筑波方式」という言葉で片付けられ、当時筑波大学の中においてさえもその理解度は決して高かったとは言えないように思われました。一職員の立場としてその歯がゆさをも感じたものです。

他大学等を経験して

私は、平成になり、暫くして筑波を離れ、高専、他大学を経験させていただくこととなりました。筑波大学も創設され20年も過ぎようとする頃、大学を取り巻く環境は、大学改革の動きが盛んになり、勤務させていただいたいずれの大学においても、だんだんと筑波大学に似てくるような気がしてなりません。教養部を廃止し多様な学生に応えるカリキュラムを編成、教員の欠員の有効活用、教育と研究を分離した組織、副学長制等々。ただ、ある大学にいた際に、私が事務処理機能の集中化へのレポートを書いたら、この大学は筑波とは違う、と耳を貸してもらえなかったこと

もありました。しかし今では事務処理機能の集中化はごくごく普通に考えられ、実施されております。

私としては、他大学においても「筑波方式」がそのまま受け入れられたような感じを受け、新構想と謳われた、「筑波大学の構想」は本当にすばらしい構想であったんだと、改めて感じさせられております。

筑波大学に期待すること

創設準備から創設期にかけての私なりの試行錯誤の思い。そして経験した大学における大学改革の一つとして筑波方式と同じような方式の導入。このようなことから、法人化後においても筑波大学が先導的に進まれることを期待いたします。またそのことができるのが筑波大学ではないでしょうか。

法人化後の大学の歩みを先導され、教育・研究の充実、発展させていかれることを、心からお祈り申し上げます。

おおいし ひろお